

赤十字NEWS

January 2015 Vol.896
<http://www.jrc.or.jp>

1



日本赤十字社

人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



「苦しんでいる人を救いたい」 思いを一つに いま行動のとき

新年を迎えるにあたり「赤十字NEWS」は、国民的な人気ダンス&ボーカルユニットEXILEのATSUSHIさんをお招きして、日本赤十字社・近衛忠輝社長との対談を企画しました。ATSUSHIさんは昨年、赤十字運動月間に書き下ろしの楽曲を提供し、CMにも出演するなど赤十字への応援を続けてきました。対談の中で近衛社長は、世界の中で赤十字が果たす役割などについて言及。ATSUSHIさんは、音楽が持つ可能性について触れながら、社会貢献活動に臨む決意を表明しました。(新春特別対談は2面掲載)

今月の出会い



フィギュアスケート選手
(男子シングル)
羽生 結弦さん

いのちをつなぎとめる、 ぼくたちにできること。

2014年ソチオリンピックで金メダルを獲得し、日本中を沸かせたフィギュアスケートの羽生結弦選手が、今年「はたちの献血」キャンペーンキャラクターに就任しました。

羽生さんは、新たに成人となる若者を中心に、献血への協力と参加を呼びかけるにあたり、「20歳になったから、そして金メダリストになったからこそできることとして、たくさんの方々にメッセージを伝えていきたい」と表情を引き締めます。

東日本大震災が発生した時は地元仙台市内のリンクで練習中。自宅も被災したため、避難所で4日間を過ごしました。いまだに大

きな爪痕が残る被災地ですが、多くの支援により復興しつつあります。そうした姿に羽生選手は「たくさん的人が同じ目的に向かって行動することのパワーを感じています」。

そのパワーは献血にも通じるもの。「自分の一部である血液を提供することで、誰かのいのちを救うことができる。そんな献血の素晴らしさを知ってもらい、「自分もやってみよう」と一歩を踏み出してください」と熱い思いを語ってくれました。

PROFILE

1994年12月7日生まれ、宮城県仙台市出身。4歳からフィギュアスケートを始め、ジュニア時代には日本人男子として4人目の世界ジュニアチャンピオンに輝く。シニア移行後、2014年ソチオリンピック男子シングル金メダル獲得。2014年GPファイナル連覇。今年「はたちの献血」キャンペーンキャラクターに就任。

CONTENTS

TOPICS

- EXILE ATSUSHIさん×
日赤近衛社長 新春特別対談
第9回赤十字・いのちと献血
俳句コンテスト表彰式

TOPICS

- 東北から神戸へ 復興の思い新たに
はたちの献血キャンペーン
羽生結弦さん
天皇皇后両陛下から御下賜金
常任理事会開催報告
健康豆知識 頭痛

SPECIAL

- 阪神・淡路大震災から20年
進化する災害ボランティア

AREA NEWS

- 大分・東京・北海道・広島・茨城
香川・岡山・鹿児島・群馬
第5回アジア編集者会議
ランチタイムに幼児安全法講習
日本×スイス国交150周年 写真展
サンタが子供の家に
クイズ赤数字 答え
プレゼント

WORLD

- エボラ出血熱救援
スマトラ島沖地震・
津波災害から10年
ハイチ 大地震から5年



答えは7面をご覧ください



新春特別
対談

国境を超える音楽と赤十字 その力を信じたい

EXILE ATSUSHIさん × 日本赤十字社 近衛忠輝社長

持ち得るんだと。

近衛 10年前のスマトラ島沖地震・津波災害の後、インドネシアでは五輪真弓さんの「心の友」という曲が、被災者を元気づけたという話を聞きました。東日本大震災の後も復興支援ソング「花は咲く」などが話題になりました。

ATSUSHI 歌を仕事とさせていただいている自分の使命として、これからも社会貢献を継続していきたいと考えています。

世界へ届けたいメッセージ

近衛 私たち赤十字は「暴力のない世界」を国際的なスローガンに掲げています。それを実現する取り組みの一つが文化の多様性の尊重です。お互いに違いを認め合い寛容であることが、暴力に頼らない解決につながると信じています。

ATSUSHI 文化を押し付けたり、奪ったりすることが争いになっていくわけですね。

近衛 音楽の世界では、いろいろな国の音楽の個性が生かされ、ときには混じり合って音が紡がれている。「暴力のない世界」の良いお手本と言えるかもしれません。

ATSUSHI 僕らの音楽も日本語と英語が混ざり合っています(笑)。

近衛 昨年の赤十字運動月間にご提供いただいた「Angel Heart」も素晴らしい曲でしたね。どのような経緯で作られたの

でしょうか。

ATSUSHI ニューヨークに住む友人の作曲家から提供された曲に詞を付け始めたら、自然に平和をテーマにした歌詞が生まれてきました。僕の中にあった「一人の人間として何ができるのか」という問いかけが、この曲の元来持っていたメッセージ性を具体化させたと考えています。

近衛 赤十字と同様、音楽にも国境がありませんが、ネットの発達でどの国の曲であっても、世界中の人が楽しめる環境が生まれています。そういう意味で音楽の持つ影響力はいっそう大きくなっているように思います。

ATSUSHI そう思います。ですから「Angel Heart」のミュージック・ビデオには日赤さんの資料映像も使わせていただき、右には日本の歌詞、下には英語の訳を付けてみました。世界の人に、メッセージが伝わればうれしいですね。

近衛 期待しています。本日はありがとうございました。今後も末永くお付き合いいただければと思います。

ATSUSHI こちらこそよろしくお願ひします。ありがとうございました。

※ATSUSHIさんの楽曲「Angel Heart」のダウンロード収益を日赤の国際活動資金としてお寄せいただくもの。同曲はiTunesで3月31日まで限定配信

※イスラム圏では、赤十字ではなく赤新月と呼ぶ。十字がキリスト教を連想させるため、イスラム教国で親しまれているシンボルの「月」を使用。

近衛社長(以下敬称略) 明けましておめでとうございます。昨年は赤十字運動月間(5月)への楽曲提供や年末の「ドネーションキャンペーン」など本当にお世話になりました。

ATSUSHIさん(以下敬称略) 明けましておめでとうございます。赤十字さんにはこちらこそ感謝しています。世界には、僕たちが知り得ない所で支援を求める人がいます。もちろん僕らには直接支援する手段が少ないので、そうした人々に僕らに代わって赤十字が支援を届けてくださることを、本当に感謝しています。

近衛 赤十字は189カ国のが様々な活動を展開していますが、大きな紛争や災害時には連携して救援活動にあたります。その果たしている役割には大きなものがあると思います。しかし、例えシリアの紛争では人道的なルールが守られず、赤新月*(赤十字)スタッフやボランティアが45人も命を落とすなど困難に直面しています。また、気候変動による甚大な自然災害が頻発していますし、エボラ出血熱など

新たな感染症の問題などを考えると、私たち赤十字はもっと力を付けていかなければなりません。

ATSUSHI 「平和」の反対は「戦争」のイメージですが、災害や貧困、病気で苦しんでいる状態も決して「平和」ではないと感じています。日本でもいじめに苦しんだり、自殺に追い込まれる人がいる。そうした問題にも関心を持っていきたいですね。

歌い手としての使命

近衛 赤十字は、一人のスイス人実業家が「戦場で傷ついた兵士たちを敵味方の区別なく救いたい」という思いを実践したところから始まっています。ATSUSHIさんが社会貢献に関わろうという思いを抱く出発点になった出来事は?

ATSUSHI 一通のファンレターがきっかけでした。「ATSUSHIさんの歌を聴いて救われて、自殺を思いとどまりました」という手紙を読んだ時、歌の力を意識するようになったんです。人を勇気づけたり、大げさかもしれません誰かを救う力だって

第9回赤十字・ いのちと献血俳句 コンテスト表彰式

厚生労働大臣賞には、中野弘樹さん(埼玉県)の作品「初孫の知らせをうける田植えかな」が選ばされました。初孫誕生のメールが届いた携帯電話を見ていたら、うれしくて

35万句の「いのちの交響曲」から 受賞作品が決定



生活の中のいのちの輝きを五・七・五に紡いでいくことで、献血の大切さや赤十字への理解を広げていこうと日本赤十字社が開催している「赤十字・いのちと献血俳句コンテスト」の表彰式が12月14日、日赤本社(東京・港区)で行われ、15作品に厚生労働大臣賞などの各賞が贈られました。

第9回を迎えた今回、全国から寄せられた作品は約35万句。いのちといのちの触れ合いや思いやりなどを描いた「35万句のいのちの交響曲」(黛まだか審査員長)です。

受賞作品 (上位10作品・敬称略)

厚生労働大臣賞(埼玉県 中野弘樹)

初孫の知らせをうける田植えかな

文部科学大臣賞(東京都 渡部真帆)

鰐戻る生まれし川に飛沫上げ

ゲスト審査員の女優・南沢奈央さんは、いさつの中で、俳句を趣味にしていた祖母を亡くした体験に触れ、「祖

母の背が小さく見えた卒業式

日本赤十字社社長賞(香川県 新谷梨光)

雪だるま何も言わずとけてゆく

ゲスト審査員賞(福岡県 八田萌)

シリもちといっしょにぬけたサツマイモ

ピカチュウ賞(神奈川県 堀岡美津希)

ウミガメの赤ちゃん海へまつしぐら

最優秀賞・小学生の部(埼玉県 兼久想太)

赤ちゃんは雪といっしょにやつて来た

最優秀賞・中学生の部(静岡県 鈴木舞衣)

ばあちゃん家新茶の香に包まれる

金木犀いつか私も母になる

最優秀賞・一般の部(鹿児島県 白坂昭典)

献血を終へて祭の中にある

全受賞作品は[こちらをご覧ください](http://www.ken-haiku2014.jp)
<http://www.ken-haiku2014.jp>

ホツとしたあの日のことが浮かんできました」と句に込めました。思いを語ります。

文部科学大臣賞は、「鮭戻る生まれし川に飛沫上げ」。作者の高校生の渡部真帆さん(東京都)は「朝食に出た鮭を食べようと思った瞬間、卵を生みに川をさかのぼる力強い鮭の姿といのちへの感謝の気持ちが浮かんできました」と笑顔で作品を語ります。

奈央さんは、いさつの中で、

子どもらしい伸び伸びしたま

なぎしで、年配者は経験を踏

んでいました。俳句

の意義を強調しました。

作品を講評した審査員長

の黛まだかさんは、「子どもは

子どもらしい伸び伸びしたま

なぎしで、年配者は経験を踏

んでいました。俳句

の意義を強調しました。

作品を講評した審査員長

の奈央さんは、「子どもは

子どもらしい伸び伸びしたま

なぎしで、年配者は経験を踏

んでいました。俳句

の意義を強調しました。

作品を講評した審査員長

の奈央さんは、「子ども

阪神・淡路大震災から20年

試行錯誤で成長 災害ボランティアのいまを探る

兵庫県内を中心に死者・行方不明者6310人、全半壊家屋約24万棟など当時として戦後最悪の被害となった平成7(1995)年1月17日の阪神・淡路大震災。避難所や公園などへの避難者は31万人以上に達し、その生活支援に全国から個人・団体のボランティアが駆けつけました。巨大災害時には、行政による被災者支援が追いつかないことは、阪神・淡路大震災の教訓の一つ。災害ボランティア、NPOが各地で産声を上げるきっかけとなり、日本赤十字社も災害に備えたボランティア育成に力を入れてきました。あれから20年。4年前の東日本大震災の経験も踏まえながら、災害ボランティアはいま新しい課題に向き合いつつあります。



対談

「NPOは災害前から地域課題に向き合い始めました」

「地域の課題を認識していた被災地ほど外部支援はうまくいきます」

西島 ボランティアが災害支援に本格的に関わった点で、阪神・淡路大震災はターニングポイントになった災害でした。中川さんは現地での取材中、その存在をどう見ていらっしゃいましたか。

中川 私は芦屋市が地元ですから、住み慣れた街がガレキの山になっている有り様に呆然しながら取材をしていました。そんな時、避難所で「ボランティア」という手書きのゼッケンを付けた方を見て、その姿に勇気づけられたことを思い出します。

西島 災害は応用問題の連続。まったく同じ災害はありません。災害ごとに被害は異なりますし、被災地が元々持っている力にも差がある。ボランティアに求められる役割は当然異なってきます。それを見極め、役割を割り振ってください。大変な調整力が必要です。養成研修の中だけでは教えきれませんでした。

地域課題を掘り下げるのは誰か?

中川 皆さん、何か役に立ちたいと被災地に入るのですが、そうしたボランティアの方が上手く活動できる仕組みがなく、現場では試行錯誤の連続だったと思います。そのため、ボランティアをコーディネートする人が必要だと考えられて、各地でコーディネーターの育成講座などが始まったわけです。

見切り発車だったコーディネーター育成

中川 ところが、そのボランティア・コーディ



日本赤十字社事業局救護・福祉部長
西島秀一
(東日本大震災復興支援推進本部長)

ネーターの役割や位置づけについて、地元が被災したときに受け入れる役割なのか、よその被災地へ行って支援に回るのか、活動の場所などを十分整理しないまま養成を始めてしまい、また経験がないのに「私はコーディネーターです」と仕切る人もてきて現場を混乱させるなど、最初は失敗の連続だったと思います。

西島 災害は応用問題の連続。まったく同じ災害はありません。災害ごとに被害は異なりますし、被災地が元々持っている力にも差がある。ボランティアに求められる役割は当然異なってきます。それを見極め、役割を割り振ってください。大変な調整力が必要です。養成研修の中だけでは教えきれませんでした。

より強固な災害支援のネットワークを

中川 こうした組織同士がつながり、顔合わせておくことで連携できるという問題意識も阪神・淡路大震災からです。NPOをつなぐいくつかのネットワークが生まれましたが、実際には連携はそう簡単ではありません。各団体はそれぞれに日ごろの役割や成立の背景がありますから。

西島 特に医療救護が中心的な役割である日赤は、自己完結的に活動してしまう傾向は否めません。

中川 それだけの力を持っているわけで、当然です。それでも、初動で被災地に入った救護班がつかんだ情報を、その他の団体が活動する際の注意点として共有することなどは可能ではないでしょうか。また、地区単位に組織がある赤十字奉仕団が、地域の活動だけでなく、支援を受け入れる「受援」の核になることを期待したいですね。

地域社会の将来展望も念頭に

中川 震災以降の20年で高齢化が進む一方、介護保険が作られるなど社会も変化しています。南海トラフの巨大地震や首都直下地震などを想定する際には、将来の社会変化も想定しなければなりません。もう一步言うと、受け身の変化だけでなく、私たちがどんな地域社会を目指すのかという方向

性を持つことが重要だと感じています。

西島 その視点は大切ですね。地域課題を掘り下げるときにも、目先だけでは駄目で、将来を見据えていく必要があります。また一方では「困っている人を助けたい」という赤十字の基本的な思いから出発することも大切です。その部分で支援、連帯の輪が広がってきたわけですから。

中川 世界で初めて災害救護を行った赤十字は日赤[®]です。それは、災害が多発するこの地で互いに支え合い、助け合う「お互いさま」の文化が、根づいていたことが背景にあってのことだと思います。災害時に多様なボランティアの活動があるのも、同じ背景からだと思います。全国の地域の課題を見極めながら、人とつながり、次の災害に備えていくのは気の遠くなる作業ですが、私たちにはその力があると思っています。

西島 前向きに取り組まなければなりませんね。今日はありがとうございました。

*明治21(1888)年、福島県の磐梯山が噴火し約500人の死傷者が出了際、日本赤十字社は医師らを派遣。赤十字として世界に先駆けて行われた災害救護とされています。



時事通信社解説委員
中川和之さん

●被災者の声を支援に反映させていこう

NPO法人レスキューストックヤード代表理事 **栗田暢之さん**

阪神・淡路大震災以降、災害時には各地のボランティアセンターがボランティアに活動を割り振る仕組みができあがりました。しかしその結果、ボランティアの活動範囲が限定されてしまう弊害も出ています。東日本大震災でもその傾向がありました。

私が大学の事務職員として学生を引率して被災地に行った阪神・淡路大震災のときは、被災者の生の声を直接聞くことでボランティアが伸び伸び活動していました。例えば、盲学校での炊き出しでは、「焼き肉を食べたい」の声を実現しようと、大学当局に掛け合って焼き肉を提供。地域の皆さん含めて1000人くらいで交流したこともあります。こうした活動から学んだことは、被災者の声を聞く事の大

大切さです。そしてその声を様々な機関につなぎ、できれば自治体や国を動かす。被災者支援の要である行政とNPOが協働することでより大きな力を発揮できるのです。

阪神・淡路大震災での教訓の一つに、ボランティア組織間の横の連携があります。当時はそれが無く、お互いの活動の過不足を補う事ができませんでした。その反省に立ち、震災の年の7月に愛知県内のボランティア団体をつなぐネットワーク組織を結成し、10年ほど前にNPO法人化しました。組織間の情報交換や顔の見える関係は、東日本大震災の支援活動でも生かされたと思います。

日赤さんとは普段接点が薄いんですが、協働の余地はあります。例えば、医療救護活動と福祉支援は連続する部分も多い。救護班と福祉系NPO、そして被災者の声を直接聞いている私たちとの情報交換などで、被災者支援の充実につながることを期待しています。

●福祉・介護分野での日赤との協働に期待

社会福祉法人全国社会福祉協議会 理事・事務局長 **渋谷篤男さん**

災害後の被災者の「孤立化」は、阪神・淡路大震災で注目されました。仮設住宅への入居で地域がバラバラにされ、復興住宅への転居で再度バラバラにされる。被災者の孤独死が社会問題になりました。東日本大震災ではボランティアもNPOも、最初からこの問題を意識。バスで被災地に行くボランティアの存在が「遠くから心配してくれる人が来てくれた」と喜ばれたのも、孤立化の背景があつてのことだと思います。

一方、外部支援を敬遠する傾向はどの被災地にも根強く残っています。地域の行政や住民は「自分たちでやれる」と。多くの被災地は災害初体験ですから、被災者支援が地元だけの手に負えないことを

想像できていない。そうした地元とボランティア、NPOとの調整するのが私たちの仕事であるわけです。

阪神・淡路大震災で被災者支援に不可欠であることが認識された災害ボランティアは、その後の災害での経験も踏まえ、平成16年の中越地震以来では組織間の協働の動きができるようになりました。「顔の見える関係」が作られましたが、それだけでは協働の広がりという点で不十分なところもあります。

日赤さんは、医療支援の救護班はもちろん、ボランティアの皆さんも力を持っていて、独立して動ける組織ですが、NPOや社協と一緒に活動するチャンネルを増やしていただけると嬉しいですね。特に福祉・介護の分野です。お互いに情報を出し合うことが、被災者のメリットになると考えています。

阪神・淡路大震災での日赤の活動 経験踏まえ「DMAT」「こころのケア」もスタート

日本赤十字社は阪神・淡路大震災で延べ981班の救護班を派遣。要員数は約6000人に及びました(同年の3月20日までの期間。淡路島は3月31日まで)。また、神戸赤十字病院、須磨赤十字病院(当時)

の支援に全国の赤十字病院から医師など876人が派遣されました。

阪神・淡路大震災では、発災直後に適切な救命治療が施されれば500人のいのちが救えたと指摘されています。この経験を踏まえて生まれたのが、超急性期といわれる発災後72時間の中で救命治療を行う「DMAT」(災害派遣医療チーム)。日赤内にも139班が登録されています。

「こころのケア」が注目されたのも阪神・淡路大震災でした。日赤では平成15年から「こころのケア」の指導者養成を開始。現在、536人が指導者として各地でこころのケア要員を養成しています。

AREANEWS

国民保護実働訓練に参加 医療チームを日赤が統括



大分県

有事の際の住民避難・誘導、救援などを国民保護法に基づいて行う大分県国民保護共同実働訓練が11月12日に実施され、大分県支部から救護班と防災ボランティアが参加しました。



有事の際の関係機関の相互連携を確認することも今回の訓練の大きな目的です

今回は、大分県初の国との共同実働訓練。テロ組織による電車爆破事件が発生したという想定で、避難誘導や傷病者の救出・救助が行われました。日赤救護班をはじめ大分DMAT(災害派遣医療チーム)など6つの医療チームが出動。日赤救護班の班長(医師)が全チームの統括を務め、トリアージ(治療優先度の選別)や医療活動を指揮しました。また、大分赤十字病院では、現場から搬送されてくる傷病者の受け入れ訓練を行いました。

災害時救護のスキルアップ目指し 救護班研修会を開催



北海道

救護班の技術向上を図る「全国赤十字救護班研修会」が11月22日から3日間、札幌市で開かれ、道内10の赤十字病院や仙台、秋田などの救護班要員、指導スタッフなど計約160人が参加しました。



次々と運ばれて来る模擬患者のトリアージと点滴・酸素マスクなどを使った処置など、本番ながらの実習

この研修会は、超急性期(災害発生後72時間以内)でのより高度で専門的な救護の方法を学ぶもので、北海道での開催は初。「災害救護とは何か」やDMATとの連携などについてグループワークを交えて学んだほか、患者のトリアージ、体育館を救護所に見立てた実習などが行われ、災害救護活動で求められる知識や技術を研鑽しました。

また、厳寒地における冬期避難所の運営など、北海道ならではの講義も行われました。

楽しい講座で子育て中のお母さんをサポート



大分県

大分県支部は11月7日、「赤十字子どもすくすく講座」を開催しました。子どもの応急手当を学び育児に役立ててもらおうと、平成18年から続けているもので、今回は乳幼児とその保護者17組36人が参加しました。



実習時には子育て支援ボランティア「スマイル」が、託児を一手に引き受けってくれました

参加者は、子どもに起こりやすい事故の際の手当や心肺蘇生とAED(自動体外式除細動器)の使い方などを実習。また、子どもの事故の危険性と事故予防の大切さを伝える手作り紙芝居を見たり、手遊び歌や絵本を読み聞かせたりと、親子で触れ合う楽しいひとときを過ごしました。参加者からは「いざという時にはしっかり実践したい」などの声が聞かれました。

ボランティアが復興支援 元気と勇気を被災地に



岡山県



一年ぶりの再会を喜び合い、おなかもこころも満たされました

岡山県支部の防災ボランティア23人が11月1、2日、岩手県内の仮設団地を訪問。被災地に元気と勇気を届けようと交流会を実施しました。

初日の山田町では、お茶会やミニコンサートなどを催し、会場は仮設入居者の笑顔で包まれました。二日目の大船渡市では、地元の大漁旗がなびく会場でリラクゼーションや地元民謡の踊りで交流。倉敷名物の「ぶっかけうどん」も振る舞われました。

質の高い介護を目指して 全国研修会を開催



鹿児島県



各施設とも様々な課題を抱えており、研修会は情報交換の貴重な場にもなっています

介護、調理、生活相談など各部門職員による全国赤十字老人福祉施設研修会が11月20、21日、特別養護老人ホーム錦江園(鹿児島市)などで開かれました。入居者への質の高いケアとサービスの提供を目指したもので、全国から70人が参加しました。

参加者は認知症入居者の支援策について討議。認知症による行動障害の原因を、生活習慣や性格などに基づいて考えていく必要性を確認し合いました。

手作りリースでメリークリスマス 海外たすけあい



東京都

関東甲信越ブロック血液センターは12月4日、献血ルームfeel(東京・墨田区)でクリスマスリース作りのワークショップイベントを実施しました。

赤十字国際委員会(ICRC)と共に開催した今回のイベントには、23人が参加。日本や世界で支援が必要な子どもたちの実情と日赤の活動について対話したあと、フラワークリエイター塚田有一さん指導のもと、参加者3~4人で1つのリースを作りました。学生参加者は「楽しくて、チャリティーにもつながるイベントっていいですね。友だちも説明しやすいです」と顔をほころばせます。当日は飲み物代をチャリティーとし、集まったお金は海外たすけあいの寄付に充てられました。



笑顔と一緒に届くことを願い、心を込めて作られたリースは、赤十字子供の家に届けられました

看護学生4人が人命救助 学長から特別表彰



広島県

日本赤十字広島看護大学の4人の学生が、地域のソフトボール大会中に心肺停止で倒れた男性への救命処置を行い、12月2日に学長特別表彰を受けました。

倒れたのは60代男性。4人は参加者の中にいた看護師と共に胸骨圧迫や人工呼吸を行い、救急隊に引き継ぎました。迅速な初期対応により、男性は良好な経過で回復しています。表彰式で小山真理子学長は「本学の学生として他の模範となるもの。今回の行動と勇気を糧に、さらに勉学に励み立派な看護師になってください」と笑顔で激励。学生たちは「自分たちにできることをしただけです」と照れながら表彰を受けました。



同大学では、2年生の講義で赤十字救急法を教えています

草の根赤十字活動の要=奉仕団 新たに2団結成



茨城県、香川県

草の根の赤十字活動を支える奉仕団。新しい団の結成が各地で続いている。

茨城県では潮来市赤十字奉仕団が、元民生委員の方などで結成されました。県内の奉仕団結成は4年ぶりです。11月12日の結団式で長谷川彌委員長は「身近な問題を自分の問題として捉え、活動に取り組みたい」と決意を表明しました。



(上) 潮来市赤十字奉仕団結団式、(下) 香川県立保健医療大学学生赤十字奉仕団結団式

若い力が結集したのは、学園祭での募金活動をきっかけに17人の学生で結成された香川県立保健医療大学学生赤十字奉仕団。12月1日の結団式で伏見彩香さん(2年)は「赤十字活動を通して、自分たちの成長につなげていきたい」と力強く意気込みを語りました。

奉仕団が大奮闘 避難訓練に800食の炊き出し



群馬県



同奉仕団では6年前から市内の学校と連携した避難・炊き出し訓練を実施しています

みどり市大間々赤十字奉仕団(須藤日代委員長)は11月25日に行われた県立大間々高等学校・みどり市立大間々中学校・二葉保育園の合同避難訓練に参加。生徒・園児・教職員ら約800人に炊き出しのカレーを提供しました。

団員42人はこれまでの訓練を生かして手際よく調理。生徒からは「災害時にこんなにおいしいカレーが食べられればうれしい」などの声が出されました。

ランチタイムに幼児安全法講習 銀行の社員育児支援に日赤が協力

突然の子どものケガの手当

みずほフィナンシャルグループの資産管理サービス信託銀行（東京都中央区）で12月9日、同社社員を対象に日赤職員が指導者となって赤十字幼児安全法のうち「子どもに多いケガの手当」についての講習が開かれました。同社は外部講師などを招いて昼休みにミニセミナーを開く「ランチタイムミーティング」を行っています。今回の講習は日赤の法人寄付勧奨での訪問がきっかけで、本社の救護・福祉部と総務部、組織推進部が連携し、赤十字支援マークのウェブサイト掲載とともに実現しました。



日赤指導員の指導のもと2人一組になって傷の手当。「ストッキングってこんなふうに使えるの!?'とビックリ

当日は、子育て中の男性社員も含めた27人がバングル（三角巾）やストッキングを使ったけがの手当、頭の包帯、腕の固定など応急手当の方法を学び、「身近なもので応急手当ができるのは便利」「いざという時に役立ちそう」などの感想が寄せられました。



「空飛ぶ救急治療室」と呼ばれるドクターへリ。医師と看護師、救命救急の資機材を積み、時速200キロで現場へ直行します。赤十字病院では現在5カ所（旭川、秋田、前橋、伊勢、熊本）に配備されていて、出動回数は合計で年間2335回（平成25年度）にも及びます。

赤十字病院でのドクターへリ導入は平成21年からスタート。一刻を争う重篤な患者の救命治療に駆けつけるのが目的です。旭川赤十字病院では、遠隔地の救急患者に医師、看護師が接触するまでの時間が平均40分早くなりました。同院ドクターへリの責任者、住田臣造副院長は「いのちを救えるかどうか。この40分の差は決定的」とへりによる現場急行の重要性を強調しています。

※各病院の出動回数（平成25年度）は、旭川507回、秋田247回、前橋843回、伊勢192回（同院は2病院で運用。県単位の出動回数は371回）、熊本546回となっています。

プレゼント

東海北陸7県限定で当地けんけんちゃんセット（フィギュア）を3名様にプレゼントします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールにてご応募ください。



- ①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS1月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
- ⑥1月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
- ⑦今月の出会い ⑧EXILE ATSUSHIさん×日赤近衛社長 新春特別対談
- ⑨第9回赤十字・いのちと献血俳句コンテスト表彰式
- ⑩はたちの献血キャンペーン 羽生結弦さん
- ⑪東北から神戸へ 神戸ルミナリエ ⑫天皇皇后両陛下から御下賜金
- ⑬健康豆知識 頭痛の対処法
- ⑭特集 阪神・淡路大震災から20年 災害ボランティアのいま
- ⑮エリアニュース ⑯第5回アジア編集者会議
- ⑯ランチタイムに幼児安全法講習 ⑰日本×スイス国交150周年 写真展
- ⑱子供の家にサンタがやって来た ⑲クイズ赤数字 ⑳ワールドニュース
- ㉑赤十字NEWSへのご意見、ご感想、扱ってほしいテーマなど

応募先 ● 郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室 赤十字NEWS1月号プレゼント係
FAX／03-3432-5507
メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字NEWS1月号プレゼント係」）

応募締切 ● 1月26日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



<http://www.jrc-akb48.jp/>



<http://www.jrc-undougekkan.jp>

第5回アジア編集者会議

人道を守るために赤十字とメディアが共有すべき課題を議論

紛争や災害時に真っ先に駆けつける赤十字とジャーナリスト。人道が危機に瀕する現場で、それぞれの組織・個人が共有していくべき課題を探っていくうと「第5回アジア編集者会議」が11月26日から28日まで広島市内で開かれました。主催は、赤十字国際委員会（ICRC）。アフガニスタンやインド、中国、オーストラリア、日本などアジア・大洋州の12の国から取材経験豊富なジャーナリスト23名が参加し、意見交換を行いました。

紛争下の危機管理についてICRCは、メディア関係者が取材中に消息を絶た際に追跡調査のリクエストを受け付けるメディア専用ホットラインを紹介。参加者からは、危機管理研修のないまま記者が派遣されている実態の指摘とともに、「研修に赤十字も加わって、救急法や国際人道法を教えてほしい」との要望も出されました。

報道倫理については、災害の頻発化に伴い死者が少ないケースの報道が難しくなっている問題やメディアによるプロパガンダが紛争の混乱に拍車をかけている実態、一般市民が発信するネット上の情報にメディア側が引きずられ、報道の信頼が揺らいでいる点などが指摘されました。日本赤十字社は、東日本大震災の際に一部海外メディアが遺族の意向を無視して遺体を撮影した点などを指摘。「被災者の尊厳の確保とその国の文化の理解に立った報道を」と訴えました。

こうした議論を踏まえ、参加者からは「国際組織やNGO、ジャーナリストがもっと協力関係を構築することが大切」などの意見が出されました。



「紛争・災害時のメディアの役割」と「人道機関に求めるもの」についてディスカッションを行う各国ジャーナリスト

人道写真家ジャン・モア氏の写真展 広島平和記念公園で開催

人道写真家ジャン・モア氏の写真展が赤十字国際委員会（ICRC）とスイス大使館の共催により11月26日から1カ月間、広島平和記念公園で開催されました。ジュネーブ条約誕生150年と日本・スイス国交樹立150周年を記念したもの。



ジャン・モア氏は元ICRC職員。世界の紛争地を回り戦禍の人びとの日常を撮影してきました。写真展はそうした作品を通じて、戦争の実態と人道支援の大切さを訴えたもの。開催に先立つセレモニーで日本赤十字社の近衛忠輝社長は「写真展が平和記念公園で開催されたことで核兵器問題が改めて喚起され、その使用禁止と廃絶につながる運動に拍車がかかるなどを願っています」とあいさつしました。

「子供の家」に サンタクロースがやって来た！

赤十字国際委員会（ICRC）駐日事務所代表のヴィンセント・ニコ氏が12月17日、サンタクロースに扮して赤十字子供の家（東京都武蔵野市）を訪問。40人近い子どもたちにクリスマスリースとパズルをプレゼントしました。



赤十字子供の家は、家庭環境上、施設養護を必要とする子どもたちのための施設。プレゼント企画は、関東甲信越ブロック血液センターとICRC駐日事務所が“施設の子どもたちにクリスマスの楽しい思い出を”と共に催したもの。プレゼントを一人ひとりに手渡したニコ・サンタに子どもたちは「どこから来たの?」「トナカイさんはどこ?」「煙突から入ったの?」と大興奮。楽しいひと時を過ごしました。

サンタからのプレゼント。子どもたちからはお返しに歌や絵のプレゼントも

WORLD NEWS

西アフリカ エボラ出血熱救援

「地域社会を守るのは私たちの使命」 感染の拡大阻止を担う赤十字ボランティア

「新たな感染を防ぐためには、誰かが遺体を埋葬しなければなりません。自分の社会を守るために、私たちはいのちがけで作業にあたっています」——リベリア赤十字社埋葬チームのリーダー、フライデーさんはこう語ります。西アフリカ諸国で感

98%の遺体を 赤十字ボランティアが埋葬

エボラ出血熱は、患者の体液に触れることで感染します。患者が重症化するほどウイルス量が増える傾向にあり、亡くなつた際にウイルス量が最大化して感染力も最も強くなるので、遺体の取り扱いには細心の注意が必要です。ところが西アフリカでは、埋葬の際に家族や親族が遺体を洗う風習があるため、感染拡大の一因となっていました。

赤十字ボランティアは、地域への啓発活動を通じて、歌を歌ったり祈りを捧げるなどの方法で死者を弔うよう説得し、遺族に代わり安全に遺体を埋葬します。ボランティアの多くは地域のために名乗りを上げた若い男性です。120時間に及ぶトレーニングを受けた彼らは、厳重な防護服を着用し、7人1チームで行動。遺体回収後の家の消毒も行います。西アフリカでは現在、約1万人のボランティアが活動しており、その中

で約800人が遺体埋葬の活動に従事しています。

妻と6人の子どもがいるフライデーさんは「私たちは遺族に説明し、納得の上で遺体を埋葬します。私も家族もこの仕事の意義を十分理解しています」と決意を語ります。エボラ出血熱による死者の98%は、各国の赤十字ボランティアが埋葬。これまでに1人が感染しましたが、治療を受け回復し、普通の生活に戻っています。

家族を励ます「こころのケア」

確実な治療法がなく、致死率が高いエボラ出血熱は、家族や地域の人びとを恐怖に陥れています。そのため「こころのケア」も赤十字ボランティアの活動に欠かせません。

ギニア南部グエケド町の赤十字支部長サー・ママディさんは、25歳の息子をエボラ出血熱で亡くしました。ママディさんとその家族は、感染していないことが確認されましたが、近所の人びとは彼らを遠ざけ、

染が広がるエボラ出血熱の感染者数は1万7900人を超える、死者は6388人を突破(WHO調べ2014年12月10日現在)。拡大阻止には、適切な遺体の埋葬が不可欠ですが、その任務を各国の赤十字ボランティアが担っています。

買い物すら拒否する事態に。「ギニア赤から食料とお金、ボランティアのこころのケアのおかげで生き延びることができました」とママディさんは振り返ります。

「本当はみんな、なぜ病気が広がるのか、どうすれば守ることができるのか知りたいのです。私は感染防止活動を続けます。国の将来を担う子どもたちを失わないために。」

赤十字の感染防止の取り組みにご支援を

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は昨年9月、シェラレオネのケネマに「エボラ出血熱治療センター」を開設。24時間体制で治療を行っています。日本赤十字社は、救援金を募集しています。現地のボランティアの活動を支援してください。受付期間は5月29日(金)まで。詳しくはホームページ(http://www.jrc.or.jp/contribute/help/detail_33/)をご覧ください。

救援金は、以下のような物を購入するために活用されています。

¥8,800

1人分の防護服などのセット
(シェラレオネのみで1日に
150~180セット使用)



¥1,800
ゴーグル

¥600
手袋(使い捨て)

資料:IFRC (円換算は2014年11月13日時点 1ドル115円)

¥20,000

1家族(※)が隔離される際のサバイバルキット
(食料、洋服、シーツ、洗剤、
使い捨てのコップ、
コンドームなど)



(※エボラ出血熱の感染可能性がある家族)

¥426,000

遺体埋葬チームの
装備一式
(防護服、除菌道具、ストレッチャー、
遺体の医療用専門袋など)



生する災害現場に対応するための看護教育は行われていませんでした。災害時の看護に対応できる人材を育成するため、2006年から災害看護教育支援事業が実施されました。アチェ州の4つの看護学校に日赤九州国際看護大学(九看大)が教員を派遣。学校教員の研修や「災害看護テキスト」作成などを実行しました。

うちアブリヤマ看護学校の公衆衛生学科長アムビア・ヌールッティンさんは、「今では卒業生の働く医療機関には災害対応チームが設けられ、彼らが重要なメンバーになっています。災害時に役に立ちたいと、みんな高い意識を持って頑張っています」と報告します。

在宅看護の仕事にあたっている同校の卒業生、ポピ・ファフレニさんは、訪問先で避難方法や感染症の防止策などをアドバイスしています。「10年前は何も知識がなく、たくさんの被害を出していましたが、今は大勢の人が災害時にどう対応するかを



支援事業で設立された「フォーラム」は災害看護普及のための機関。アムビアさんはその中心メンバーも務めます

知っています。これからは被害を小さく食い止めることができます」と胸を張ります。

九看大は教員を定期的に同州に派遣し、意見交換や情報提供を行うなど現在も交流が続いている。

ジャー菅原直子要員は、「『人々の健康知識が高まった結果、治療にかける費用が減った』といった声が出ています」と現地の手応えを報告しました。

一方、日赤が2013年7月から新たにコレラ予防啓発活動を開始した中央県ミバレでは、衛生環境整備の遅れが目立ちます。現地の山井美香要員は、「水やトイレへのアクセスが悪く、トイレがない地域も。いたる所にゴミが溢れている状況です」と指摘。ここでの活動は今年12月まで。衛生環境の改善と衛生知識の向上に取り組みます。



レオガムで保健衛生について指導する日赤要員(左)

スマトラ島沖地震・津波災害から10年

日赤支援事業を検証～災害に強い地域づくりへ

世界14カ国で死者・行方不明者22万人という未曾有の被害をもたらした、2004年12月26日のスマトラ島沖地震・津波災害。国際赤十字に、全世界から約3813億円が寄せられ、計480万人の被災者を支援。

日本赤十字社は、住宅再建や保健衛生、災害看護教育などの復興支援事業に2010年まで取り組みました。支援は地域にどう根づいているのか。インドネシアの支援地を訪ねました。

ふるさとになった再建住宅

この災害の復興支援で日赤が初めて取り組んだのが「住宅再建事業」です。当初「住宅の提供は私有財産の支援になる」と異論もありましたが、「住宅は人の生存に不可欠。復興の前提だ」として決断。アチェ州アチェバラ県に約2200戸を建設しました。

ハイチ大地震から5年

復興支援で地域の衛生習慣改善に成果

210万人以上が被災したハイチ大地震(2010年1月12日)。さらに、衛生設備の遅れが原因でコレラ感染が全土に広がり、約8600人が亡くなる事態に。日本赤十字社は、震災後の緊急支援に続けて、被害の大さかった農村地区のレオガムでトイレや井戸などを建設する給水衛生事業、ボランティアを通じて地域の人びとに保健衛生の基礎知識を広めていく保健事業の2つの支援活

動を展開しました。

5年近く活動で設置されたトイレは3065基。また、育成した686人のボランティアが地域を回り、感染症予防のための手洗いやトイレ使用の指導を行いました。その結果、トイレを使う人の割合が2012年10月からの1年半で34%から76%に向上了。住民の衛生習慣や知識が改善されました。現地で活動を続ける保健事業のマネ